

農委・推進委員の活動



「今後も地域の世話役として日々役割を果たしたい」と南さん

委員の仕事は地域への目配り

「熱意」と「周囲の協力」

泉佐野市農委 会長職務代理 南 昇一さん

令和4年の幕が開けた。昨年6月に閣議決定された規制改革実施計画に位置付けられている最適化活動の目標設定については、農水省から通知発出が予定され(12月24日時点、これが今後の活動の肝となる。

府内の農業委員・推進委員は、事務局と両輪となり、現在も農地利用の最適化に向けて様々な形で日々汗を流している。今回は、各地で活動に取り組む委員の姿を紹介する。

「農業委員の仕事とは、地域に目配りすること。その意味では年中365日仕事しているかもしれない」と笑うのは、泉佐野市の農業委員3期目で会長職

務代理を務める南昇一さん(71)。経営面積は約2・2ヘクタール。6割が所有地で残り4割は借地。妻の初代さん、後継者の長男・昇平さん夫婦とともに経営を切り盛りする。主力作目はミニ

トマトで、温室20アールで水耕栽培を行う。露地では水稻が中心。裏作としてキャベツ、白菜、タマネギを栽培する。

大阪府の指導農業士制度である「農の匠の会」会長も平成26年から2期、4年間務めた。力を入れてきたのが農業大学の生徒への指導。農大での講義では、自身の農業経営をテーマに話した。高校を卒業して就

こんな仕事も最適化推進のひとつ①

全国農業新聞、全国農業図書、農業委員会だより等による農業に関する情報提供活動



市町村長への意見提出

意見の積み上げ



市町村長への意見提出

農した当時の話から始まり、人との出会いで助けられたこと、苦労話から今に至るまでの生き様を語ってきた。

実習も受け入れてきたが、最近では設備投資額が比較的多くなる水耕栽培を希望する若い人が少なくなつたという。

昨年の農地パトロールで一定規模の遊休農地を確認。所有者が高齢で営農が困難だが、隣接地の農家へ草刈りなどの協力をして借りてもらうように話を進めている。

地元の上之郷地区では昭和60年頃からほ場整備が始まり、約50年が整備された。当時、地域

の合意形成に汗を流したのが30代だった南さんと地域の仲間たち。協力してほ場整備の必要性について説明に回った。その時、理解を示し地元をとりまとめるのに協力してくれた土地改良区役員や、一緒に汗をかけた市や府の担当者、助言してくれた大学の先生がいた。

「若い人に話をするときにはいつも言うんです。人生にはどこかで『好機』がある。それを活かして物事を成就させるには『自分の熱意』と『周りの人の協力』が大切。これは経営でも、農業委員の仕事でも一緒」と語った。(北川)

現場に欠かせない

他市からの就農経験活かし 新規就農者に寄り添い定着へ

豊能町農委 農業委員 和田 京さん

「担い手が減少する中、町内の農地を残していくには、町外からの人の受け入れは必須。自分も他市から就農したので、その一助になれば嬉しい」と話すのは、豊能町農業委員会の農業委員2期目となる和田京さん(46)。約1畝の農地でニンジン、リーフレタスをはじめ、年間約80品目の野菜を栽培する。

同町が開講する「とよの就農支援塾」を通じて新規就農希望者の育成に貢献し、就農後の継続的な見守りにより、就農者の定着へも尽力している。

同塾は平成29年度から開講し、令和2年度までに32人が卒業。そのうち6人が町内で就農を果たしており、さらに、今年度中には、8人が就農の予定である。和田さんは開講時から3年間、研修ほ場の管理を担当。月1回の開校日以外にも週2、3回ほどほ場へ来る塾生へ、基本的な栽培での作業等について助言等を行っていた。

当時は農業委員も1期目で、自身も就農して間もない時期。「経営や農業委員会の他の活動で手一杯の中、管理作業のほと

んどを担い大変だったが、受講生が就農したと聞いたときは、甲斐があったと感じた」と振り返る。

現在は他団体への事業の委託に伴い、塾への直接の関与はなくなったが、自身のほ場近くに就農した卒業生には、週1、2

委員と事務局の両輪により

農地利用の最適化を

門真市農委 農業委員 中道 文夫さん

「地域農業の課題を解決し農地利用の最適化を推進するためには、委員と事務局が両輪と



「委員と事務局が両輪となって頑張ります」と話す中道さん(中央)と事務局職員

なって活動することが重要だと感じている」と話すのは、門真市農業委員会農業委員の中道文夫さん(63)だ。約10年前に公務員を退職すると共に農業を継ぎ、現在はオクラ、ソラマメ、軟弱野菜等を栽培している。

昨年4月、農業委員会の補充選任で就任した。初めて参加した農地パトロールでは市内でも地域ごとに異なる課題を抱えていることに気づかされ、門真市農業の抱える問題に思いを馳せることが増えた。「見えている部分は氷山の一角でその背景には更に多く

回の頻度で会うため、引き続き相談対応等の就農後のフォローに当たっている。

「経営が安定したら、自身でも担い手を育成したい。『人の確保』は『農地の活用』に向けた最重要課題。就農しても地域になじめず辞める人も多いため、地域と新規就農者の間を取り持つていけるよう、今後も尽力したい」と意気込む。

(中島)



「とよの就農支援塾」担当者とともに(左が和田さん)

の問題が潜んでいる」と中道さん。解決するためには、現場に詳しい委員と制度に詳しい事務局とが協力して課題を整理し、解決策を練らなければならない。事務局職員は「中道さんの提案で農業委員会が大きく活性化しています」と話す。定例総会後に自由意見交換の場を設けたところ、各委員から日々の活動報告や意見、提案があり、最近では毎回1時間以上、委員と事務局が地域課題に向き合い、解決に向けた道筋を探っている。

中道さんは「農業委員として市長から農業政策の一端を任されている自負と責任を持っている。門真市ならではの農地利用の最適化の端緒を開くことが出来れば」と日々の業務にあたっている。

(田村)

(特集) 現場に欠かせない農委・推進委員の活動

コーディネートとして

遊休農地解消に東奔西走

摂津市農委 農業委員 渡邊 勝彦さん

新幹線鳥飼基地の近く、物流倉庫が立ち並ぶ道路から一步集落に入ると農地が広がる。「農家の多くは不動産収入があり、規模拡大より遊休農地の発生防止、解消が主な仕事です」。渡邊さん(65)は、5年前まで市役所で技術職として活躍。実家では自家用野菜と水稲を栽培してきた。

退職後は、伝統野菜の鳥飼なすの栽培をはじめ、一方、「農地を手放したい、管理して欲しい」という周辺農家からの懇願で、「摂津市人・農地プラン」の中心経営体となっている。地元で頼りにされ、借地が年々増えるばかり。その一方で、「農業がしたい」「教えて欲しい」と農業を志す若者たちが渡邊さんのもとに集まってくる。

だが「空いている農地があるからといって未経験の若者に安易に紹介できない」「進入路や水、販路と同じく農業のコーディネート」と渡邊さん。

地元の農業者らで構成された「農空間保全活動委員会」の活動にも参画し、レンゲ畑を保育園児に開放している。

一昨年、農業委員に就任後さらに仕事が増えた。最近「農福連携」を模索する人たちも渡邊さんの門を叩く。相談事が舞い込むと河南町や和泉市まで出かけるなど、活動は行政区域を遙かに超える。



皆で直売所を作りたいと話す渡邊さん

現在、自己所有農地が40[㌧]。利用権設定等で60[㌧]を借り受ける。昨年、府農の匠にも選ばれた。それでも「今年は50[㌧]くらい増えそう」「タマネギ1万本植えて、キャッサバに鳥飼なす：農業研修の一環として若い人に手伝ってもらおう」と苦にならない様子。トラクターやハウスは廃業する農家から譲り受ける。「乾燥機の分解にも慣れました」と笑う。

(鈴木)

次の世代に農業をつなぐ

千早赤阪村農委 推進委員 奥田 宗豊さん



一代で築いたぶどう園と奥田さん

依頼をするこ
とで、出席し
てくれること
も多い」と話
すのは、千早
赤阪村農業委
員会農地利用
最適化推進委
員の奥田宗豊
さん(73)。同
村桐山地区で、
ブドウ(巨
峰)45[㌧]、水
稲40[㌧]と裏作

依
頼
を
す
る
こ
と
で、
出
席
し
て
く
れ
る
こ
と
も
多
い
」
と
話
す
の
は、
千
早
赤
阪
村
農
業
委
員
会
農
地
利
用
最
適
化
推
進
委
員
の
奥
田
宗
豊
さ
ん
(73)。同
村
桐
山
地
区
で、
ブ
ド
ウ
(巨
峰)
45[㌧]、水
稲
40[㌧]と裏作

の
の
が、
農
道
等
の
基
盤
整
備
事
業
の
推
進
で
あ
る。
千
早
赤
阪
村
で
は、
農
地
の
ほ
と
ん
ど
が
狭
小
な
棚
田
と
し
て
傾
斜
地
に
点
在
し
て
お
り、
農
道
も
極
め
て
狭
い
う
え
に
傾
斜
が
き
つ
い
と
い
う
特
徴
が
あ
る。
そ
の
た
め、
車
の
乗
り
入
れ
が
難
し
い
な
ど、
条
件
の
悪
い
ほ
場
を
中
心
に
遊
休
農
地
が
目
立
つ
よ
う
な
に
な
っ
て
き
て
い
る。

奥田さんの場合、村外に住んでいる後継者が、時折農業を手伝ってくれており、農業も継いでくれるだろうと期待もしている。

(光崎)

「会の案内をする時は、電話や案内状を各家のポストに入れるだけではだめで、直に会って

で野菜を栽培する専業農家だ。推進委員には令和2年7月に就任。以来、熱心に取り組んで

しかし、車の出入りが難しいような営農条件の悪いほ場では、

農作業の効率が悪いだけでなく事故発生等農作業安全の面からの懸念もあり、後継者や新規就農者向けをはじめ、府みどり公社等を通じた貸借も難しく、また農作業を委託したくても受託者が敬遠する事態も想定される。

このような中、就任した年の12月には地元桐山地区の基盤整備事業の推進に向けた集落座談会が開催されることとなり、推進委員として「地区の将来を考へる座談会なので、ぜひ出席してほしい」と、昼夜を問わず在宅を確認しながら地区内の一軒一軒を回って座談会への出席を依頼した。奥田さんを突き動か

生産者と消費者を繋ぐ

八尾市農委 農業委員 中浜 多美江さん

八尾市農業委員会農業委員の中浜多美江さんは、関西消費者連合会副理事長や主婦連合会常任幹事等を務める中立委員である。30年以上にわたり消費者教育に携わってきた立場から生産者と消費者を繋ぐ取り組みに尽

力してきた。

若ごほうやえだまめなどの地場産農産物の収穫体験や、親子向けの料理教室といった消費者を対象としたイベントを開き、生産者に作物の作り方や苦労話を語ってもらうなど、農業理解

活動の見える化が不可欠

(一社)全国農業会議所 専務理事 柚木 茂夫氏

平成28年4月1日施行の改正農業委員会法では、担い手への農地利用の集積・集約化等の「農地利用の最適化の推進」が農業委員会の最も重要な事務として位置付けられました。また、令和3年6月に閣議決定された「規制改革実施計画」では「最適化活動の目標設定と委員の活動の記録・評価・公表の仕組みの構築」が盛り込まれました。

農業委員、農地利用最適化推進委員の方々は、自らの農業経営の一方で農地利用の意向把握をはじめとする農地利用の最適化に取り組みまれています。農業委員会の委員による農地の利用状況の確認や農業者の相談対応等は、農地や農道、農業用排水路の整備などのハード事業と違って活動がソフトなだけに内容や成果が外部から見えにくい状況にあります。



農業委員会活動を農業者等の理解を得て効果的に実施するためには「見える化」が不可欠であることから、これまでも活動日誌や活動記録簿への記載を推進してきました。改正農業委員

の醸成に取り組んでいる。また、地産地消の推進に関しても、学校給食への地場産米や野菜の使用が重要であるとして、所属する消費者団体を通じて市や教育委員会に要望を重ね、今では年間約20回の地場産農産物による給食も実現した。

これらの取り組みの根底には、「地域農業の振興には、消費者側からも積極的に関わり、農業

会法施行から5年が経過するなかで、令和3年度全国農業委員会会長代表者集会(令和3年12月2日開催)では、改めて、「全農業委員会において農業委員と推進委員の活動目標を設定し、活動記録簿の記載と点検・評価・公表を徹底する」との申し合わせ決議を行いました。

人・農地プランの法定化による目標地図の作成など農地利用最適化の取り組みは新たな段階を迎えます。農業者の意向把握や地域の話し合い・合意形成に向けて、農業委員・推進委員一人一人の日々の活動の見える化と情報共有が不可欠になってきます。その意味でも、日常の農地の見守り・農家への声掛け活動を含めて活動記録簿の記載の徹底を図っていく必要があります。

を正しく理解することが欠かせない」という想いがある。

農業委員としては現在2期目。1期目は、齊藤曉農委会長をはじめ農業委員・推進委員から市内農業者の姿や、担い手の高齢化など地域農業の実態や、相談業務など農地農政に関する様々な活動を教わり、農地パトロールでは今まで知らなかった場所に遊休農地があることを知った。「農業委員の日々の地道な努力が、地域農業を守り育んでいる」、「地域の消費者に今の八尾市の農業の実態を伝え、消費者の声を農業施策に反映させることが自分の役割」と実感したという。

令和2年度からは、市の都市農業振興基本計画の策定に向けた審議会委員として参画。「生産者と消費者の連携が重要」、「消費者にも読んでもらえるよう理解しやすい内容に」などの意見は、「市民の農業に対する親しみと理解の醸成」の項目など随所に反映され、計画は昨年9月に策定

こんな仕事も最適化推進のひとつ②



農業者年金の加入推進

中浜さんは今後に向けて、「都市部だからこそ生産者の顔の見える農業は不可欠だと感じている。今後も生産者と消費者を繋ぐ活動に日々取り組んでいきたい」と意気込む。(沼田)



料理教室で消費者に対して説明する中浜さん